

ボランティアへの一歩

一宮市立尾西第一中学校二年

土井 未彩

先日、祖母の家に耳の不自由なおばあさんが訪ねてきた。祖母は出かけていたので私が話を聞くと、自宅の電球が切れたが、自分では取り換えられず困ってしまい、民生委員の祖母を訪ねに来た、ということだった。おばあさんの名前と連絡先、住所を教えてください、後から祖母がうかがいます、と伝えて帰ってもらった。初めてのことで、戸惑いや緊張で胸がどきどきした。

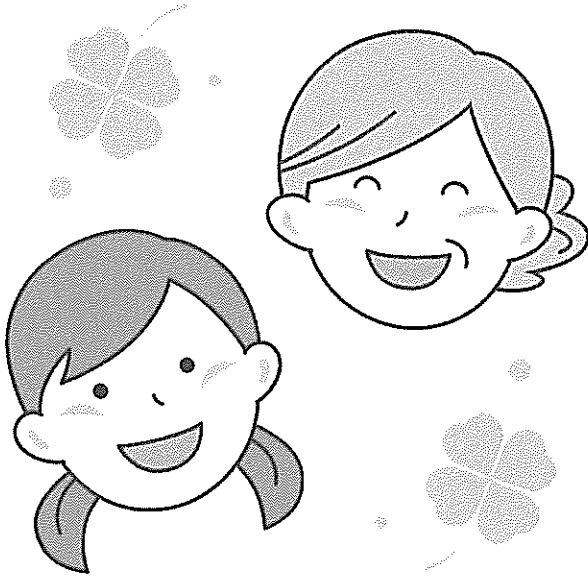
隣に住む祖母は、民生委員をしている。「民生委員」という言葉は聞いたことはあるが、実際にどんなことをしているのか、私はよくわかっていなかった。祖母が帰宅するまでにインターネットで「民生委員」を調べると、「常に住人の立場に立って相談に応じ、必要な援助を行い、社会福祉の増進に努める」とあった。民生委員制度の歴史は深く、一九一七年の「救済顧問制度」を始まりとし、生活困窮者の支援を中心に全国に広まった。現在ではすべての市町村に一定の基準が定められ、全国で約二十三万人が活動している。祖母が民生委員として地域の福祉の一端を担い活動していると知り、純粋に「おばあちゃんってすごい」と感動した。誰に対しても優しく親切で、いつも自分のことよりも人のことを考えて、できることがあればすぐに行動に移す祖母。家族だけではなく、地域の住人のことも同じように大切に想い、困っていることがあれば一緒に考え手助けしていたのだ。

帰宅した祖母に留守中にあったことを伝えると、少し真剣な顔をした

後すぐ笑顔になって「未彩ちゃんありがとう。すごく助かった。そのおばあさん、一人暮らしなの。今からおばあさんの家に行ってくるね」とおばあさんの家を訪ねに行った。祖母はもう六十九歳で、身長は私よりも低く小柄な方だ。祖母が無事におばあさんの家で電球を交換できるのか、耳が不自由で自分で電球の交換ができないおばあさんが、これから一人で生活できるのかと、色んなことが頭に浮かび心配になった。ただ、心配しても自分にはできることが思いつかず、祖母の帰りを待つことしかできなかった。

私の父親は臨床心理士の資格を持ち児童相談所で児童心理司として勤めている。母親は社会福祉士の資格を持ち市役所の障がい福祉課で働いている。自宅では父母のお互いの仕事の話を耳にする。保護者から虐待され傷付いた子ども、父母を失い住む場所がない子ども、障がいを持ち生活するのが困難な人。私がテレビやネットニュースで見ると父母は日々対面し、できうる支援を行っている。ただ、私の中ではそのことも現実ではないどこか別世界の出来事のように思っていた。そういう困難な状況を目の当たりにしたことがなかったからだ。そして想像することや理解しようとする努力をしなかったからだ。今回の出来事で、すべてが私の住むこの国で、地域で、もしかしたらすぐそばで、実際に起きている出来事なんだと実感した。

私ができるボランティアとは何かを考えた。今は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、施設を訪ねることや、大人数での活動に参加することはできない。しかし、ボランティアとは自分の意志さえあれば誰でもどこでも取り組むことができるのではないか。周囲をよく見れば、通学途中に車いすで通勤している人に会う。スーパーに行けば重い荷物を運んでいるおじいさんやおばあさんがいる。ゴミを収集所に出しにくいと、いつも通路の掃除をしてくれているおじいさんが笑顔で「おはよう」と挨拶してくれる。そうだ、私にもできることがあるかもしれない。その一歩を踏み出すか、踏み出さないか。勇気のない私には大きな一歩



だ。

先日、学校で掃除ボランティアの募集があった。友達に声をかけてもらい一緒に参加した。普段どおり決められた場所を掃除したのだが、これが学校、先生、友達のためにもなるんだと思うと、自然といつもより念入りに、できた。ボランティアを終えきれいになった教室やトイレを見渡すと、とても清々しい気持ちだった。

周囲を思い、行動を起こすためには、広い視野や気づきが必要だ。小さなことでも自分ができることを行えば、誰かの笑顔や安心につながるかもしれない。そしてそれがめぐりめぐって自分の心までも豊かにする。私には何かできるか。勇気を持った一歩を続けていきたい。

知ることの大切さ

清須市立新川中学校二年

山内

菜々恵

「知ること」それは共生社会をつくっていくうえでの第一歩だと思います。

障害をもつ人達への印象は、それぞれだと思います。多くの人々が、障害のある人は手助けを必要とし、見守ってあげないといけない、弱い立場の存在としてとらえられがちです。でも、私はそうではないと思います。私の姉は、ダウン症です。ダウン症は、発達の遅れ、見た目の特徴、合併症を生じることがあります。以前は、障害のある姉には私の手助けがたくさん必要だと考えていました。でも、ある時私は、姉を支えている以上にたくさん姉に支えられていたことに気がつきました。本当に姉が必要なのは、私の方だったのです。私は人見知りなので、初めて行く場所には必ず姉がついてきてくれます。頑張っている時には、一番に励ましてくれます。出しっぱなしだった物も、いつの間にか片づけてくれます。一人でお風呂に入れない時も、なんだかんだ言いながら、一緒に入ってくれます。私は姉のそういう優しさにとっても助けられています。また、私は姉の得意なこと、苦手なことを知っています。だからこそ、いざという時に私は、姉に手を差し伸べることができるのです。例えば、姉は会話をする時に、早口になり、聞き取りにくくなったり、適度な声量が分らず大声で話してしまったりします。だから私は、姉を急がせないよう落ち着いて会話するようにしています。姉は少しへそ曲がりなところもあって、すねて動かなくなってしまうことがあります。